

晩秋の花火

中筋 知恵

白い息が漂ってゆく先に、ななかまどの実が赤黒く浮かび上がっている。十一月上旬の薄暮のころ、双子の姉妹は軽い包みをカイロのように抱いて外へ出た。妹が人目を憚るようにあたりを見回す。薄暗い晩秋の家庭菜園をさまよう姉妹の足が数日前に降った初雪を踏みしめる。拾い忘れた馬鈴薯に皺が寄っており、竹竿に絡みついたトマトの蔓はすっかり枯れて黒く縮こまっている。清冽な寒さの前に、すべてが口をつぐんで茫然と立ち尽くす。霜よけ煙の香ばしい匂いが凍てついた大気を満たしている。

(この煙は、いったいどこまで流れてゆくのだろうか?)

いずれ煙は海へと流れ、潮の匂いと交じり合うのだろうか。空知の中心のこの街と港町小樽は明治の昔に手宮線で結ばれていた。初穀を焼く晩秋の匂いは石炭に載って、異邦人のように小樽の街へ運ばれていっただろう。「ねえ、もうこのへんでいいんじゃない?」

妹が足を止めて包みを黒土の上にあわつと置いた。私はだまってしゃがみ込み、コートポケットから懐中電灯を取り出して妹の手元を照らした。妹が包みを開けると、絵の具をそのまま絞り出したようなピンク色、青色、黄色の極彩色が、藍に沈む大気の中に溢れ出てきた。夏の残りの線香花火だった。妹は無表情に数本をより分け、私へ手渡した。各自で持ってきたマッチを擦る。しけたマッチを何度か擦るうちに、まぐれのように火が

点いた。燃え上がる前に、大急ぎで線香花火の先端へ焰を持ってゆく。

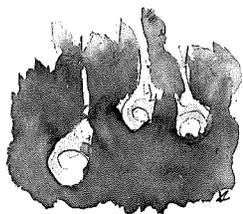
「中学二年の秋に、同じようなことしたの覚えてる?」

火はなかなか花火に燃えつかない。マッチを持つ指に焰が迫っているのを見ながら、私は小声で妹へ問いかけた。

「そうだった? こんな寒くなつてから花火やろうだなんて、少なくとも私は言い出したことないけど?」

「あのときも、たしか私が言い出したんだよ。時々、花火が見たくてたまらなくなる衝動があるの。季節なんて関係ない。冬にやっても一向に構わないんじゃない? 第一、何で花火は夏の風物詩なのかよくわからないし」

半分嘘だった。中二の私が妹を外へ誘い出したのは花火をやりたかったからではない。花火は単なる口実に過ぎなかった。十四歳の私は、命というものが、死というものを生まれて初めて深く考え、恐怖に震えて眠れない日々が続いていた。そんなこと、両親にはわかつてもらえなかつた。同い年の妹なら理解してくれる、この苦しみを分かち合ってくれる、と思った。妹に打ち明けたのかどうか、その記憶はほとんど残っていない。ただ私は、か細い体から激しく火花を上げる線香花火の痛々しさを凝視しながら思っていた。どんな命も、こうして終わってゆくのだろうと。そして、十四歳の晩秋に弾けた線香花火を、わたしはいつか、取り返せない悲



しみのなかに思い出すのだろうと。あの頃は、家族を失うことが怖くて堪らなかった。大人になる事、それはきつと大切な人たちを次々に失ってゆく事なのだろうと：喪失の確かな予感が四六時中、中学生の私を苦しめた。じゅつと音を立てて、花火の先端に赤く燃える球が生まれた。不穏なエネルギーを孕んだ暫しの沈黙。これを胎動期と呼ぶのだろうな、と思う。「いろいろ失ってきたよね、ここ数年で」

三十歳を間近にして、また双子でダッフルコートに包まれながら線香花火をやっている光景がひどく滑稽に思えた。一昨年父を失い、昨年の冬には祖母を見送った。到底耐えられないと思っていた親族の死を、私はどうして乗り越えてこられたのだろう？

「そうだね、考えてみるとお父さんと一緒に花火やったことなかったね」

妹は背を丸め、極力指を動かさないように全身に力を込めて揺らめく赤い球を見守っている。すでに火花を出し尽くして、あとは地面へ落ちてゆくだけの球体：。

「私たちはいつたい、なにを必死に守ろうとしていたんだろう？」

唐突な問いかけは吐息となって、冷え切った唇を震わせた。

「子供の頃は、失いたくないものが多すぎて息が詰まりそうだった。周りの人たちがみんな私一人を置いて去ってゆくのだ、と思うと恐ろしくて：」

二本目の火花が盛んに火花を散らし始める。こんな小さな球から、どうして激しい燃焼音と眩しい火の糸がはじき出されるのだろう？まるで魔法だ。魔法でないというなら奇跡だ。人生には確かに奇跡が存在する：そのことを精一杯に体現して燃え尽きてゆく、私の手の中の線香花火。その命の煌めきがたまらなく愛おしく、愛しさはせきあげる悲しみとなって眸を濡らし始めた。涙とは温かいものだったのか、と気づいたその瞬間、私の線香花火は緋色の雫となって滴り落ちていった。

妹の目がゆっくりと瞬いて私を見た。手袋をはめない指を頻りに擦りながら、妹は三本目の火花に火を付ける。

「大丈夫だよ」

妹は弾けはじめた火花を面白そうに見つめながら、言った。

「私は生きてあなたの目の前にいる。あなたは生きて、馬鹿みたいに寒い畑の真ん中で酔狂に線香花火を燃やしてる。私らはここで生きてる、それが全てだよ。この世界のすべて」

姉妹はいつしか肩を寄せ合って、一本の線香花火を見つめていた。燃焼を終えた焔の珠は、暮れきった夜の闇のなかで、あらゆる悲しみを孕んだ夕陽のように揺らめいた。珠はしばらくためらっていたが、やがて、赤い筋を引いて凍てついた黒土へ吸い込まれていった。